

# 「天稚彦物語」の主題と成立

田村千夏

## 一、先行研究・問題提起

「天稚彦物語」という名で知られる御伽草子には二系統の作品がある。一つは神婚説話を含む公卿恋愛物語で、「雨若御子の物語」「あめ若みこ物語」とも呼ばれる。いま一つは天界遍歴譚を含む怪婚説話で、七夕の由来譚をなし、「天稚彦草子」「七夕物語」とも呼ばれる。

本稿では、蛇婿人や天界訪問、七夕の由来などのモチーフをもつ後者を研究対象とする。これらの要素をあわせもつ諸本は相当数伝えられているが、本稿では、『日本古典文学大辞典』に基づき「天稚彦物語」と称することとする。「天稚彦物語」の本文の系統には、絵巻系と冊子系の二つがある。絵巻系の諸本は、東京国立博物館蔵『天稚彦草子』巻子本（上巻のみ）一軸、ベルリン国立東洋美術館蔵『天稚彦草子』（下巻のみ）一軸、サントリー美術館蔵『天稚彦物語絵巻』絵巻二軸等がある。冊子系の諸本は、大阪府立中之島図書館蔵『七夕』奈良絵本上中下三巻、静嘉堂文庫蔵『七夕もの語』奈良絵本上中下三巻、安城市歴史博物館蔵『七夕之本地』（赤木文庫旧蔵）絵巻二軸等があげられる。

「天稚彦物語」は絵巻系と冊子系で、挿絵の数や本文に異同が見られるなど、様々な問題がある。何より、同一の物語でありながら複数の書名をもち、絵巻と冊子という異なる媒体で伝わるという外形的相違は、本作の成立と享受の双方にわたる複雑な問題の存在を端的に示しているよう。また、絵巻系本文の代表であるベルリン国立東洋美術館蔵『天稚彦草子』の奥書には、「詞 当今宸筆 絵 土佐彈正藤原広周筆」とある。この奥書により、詞書が後花園天皇により書かれたことや、挿絵を描いたのが、当時宮廷や將軍家の御用絵師であった土佐広周であったことが知られ、絵巻系本文の信頼性を高めてきた。新潮日本古典集成『御伽草子集』において、「天稚彦草子」という名で取り上げられているのも、ベルリン国立東洋美術館本を底本とする絵巻系本文である。先行研究でも、冊子系本文は、絵巻系本文の比較対象として取り上げられるに留まってきた。

「天稚彦物語」の研究は、美術史研究者である秋山光和氏「天稚彦草紙繪巻をめぐる諸問題―上巻圖様の新出を機に―」の先駆的研究の後、文学研究者によって論争が繰り広げられてきた。秋山氏は、後に御伽草子の諸本に発展するような詳しい文章が、室町前期には既に行われていたとする。そこから、絵として興味ある場面を

十三場面程設定し、その理解に必要な程度で物語の大筋を示す本文を作り、詞書として書き添えたのが、現存する絵巻系諸本であると述べている。

松波久子氏「御伽草子『七夕』と昔話」<sup>(註2)</sup>は、本文の内容から、「絵巻系」と「冊子系」に分類できることを指摘している。前者は、古風、素朴な本文をもち、神話回帰の主題が認められ、昔話思考的であるとする。後者は、読み物的に潤色を加えた本文をもち、孝による成道を読む倫理観、仏教観が述べられ、物語的性格をもつとする。このことから、冊子系本文は、絵巻系の素朴、簡潔な本文を基本として、読み物的に改作されたと考えられると述べている。

松波氏の意見に反論するのは、勝俣隆氏「中世小説『あめわかみこ』の七夕系本文系統新旧に関する一考察―絵と本文の齟齬を通して―」<sup>(註3)</sup>である。勝俣氏は、絵巻系には、絵と対応する本文がない場面が存在すると指摘し、絵と一致する本文を有する冊子系の方が古い形であるとする。挿絵式の絵入の物語、すなわち冊子系本文が先にあり、その絵が主体となって、本文が省略化、単純化されて成立したのが絵巻系である可能性が高いと述べている。

勝俣氏の意見に反論するのは、松波氏「御伽草子『七夕』の展開―本文と絵の関連から―」<sup>(註4)</sup>である。松波氏は、冊子系は、本文と挿絵が相応しているように見えるが、素材となった説話の神話的、昔話的性格が稀薄になり、かえって本文と挿絵に齟齬を生じさせていると指摘する。巷間に知られていた物語を踏まえて、絵巻が作られ、絵巻の説話性を読物化すべく制作されたのが冊子系諸本だと述べている。

伊東祐子氏「〈天稚彦草子〉の二系統の本文をめぐって―絵巻系

から冊子系へ―」<sup>(註5)</sup>は、松波氏と勝俣氏の意見をまとめたうえで、冊子系には、江戸以降に使用されていた語法や語彙が見られることや、係り結びにくずれが生じていることを指摘する。そこで、絵巻系本文に先行する本文は「古い冊子系」ではなく、現在の絵巻系本文よりも内容の多い、「絵巻系本文の先行本文」を想定するのがふさわしいと述べている。

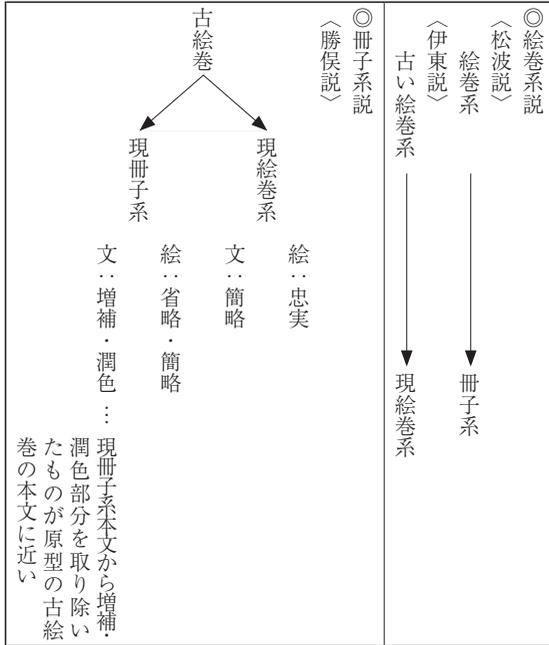
伊東氏の意見に反論するのは、勝俣氏「『七夕（天稚彦草子）』の諸問題」<sup>(註6)</sup>である。勝俣氏は、絵巻系の絵で、絵巻系本文に対応する部分のないものや、本文と齟齬がある場合、冊子系本文によってそれが説明できることを再度主張している。

勝俣氏の意見に反論するのは、伊東氏「〈天稚彦草子〉の二系統の本文の展開とその性格―絵巻系・冊子系・赤城文庫旧蔵本・乾陸魏説話をめぐって―」<sup>(註7)</sup>である。冊子系が語る、容姿の優れた、賢く、信心深く、親孝行の女性像は、女性の享受者を意識したものであるとする。また、冊子系に頻出する「孝行」という語は、江戸前期に刊行された、「女性を対象とした啓蒙教訓書」としての仮名草子の中にも多数見出されることを指摘している。

以上の先行研究における成立論についてまとめると、次のようになる。『天稚彦物語』の成立論は、大きく分けて、絵巻系説と冊子系説の二つの立場がある。絵巻系説をとる研究者には、松波久子氏と伊東祐子氏がある。松波氏は、巷間に知られていた物語を踏まえて絵巻が作られ、絵巻の説話性を、読み物化すべく制作されたのが、冊子系諸本とする。伊東氏は、本文の内容や表現から、現絵巻系は、「古い冊子系」ではなく、現絵巻系本文よりも内容の多い「古い絵巻系」からできた想定する。一方、冊子系説をとる研究者に

は、勝俣隆氏がある。勝俣氏は、古絵巻から現存の絵巻と冊子ができたとし、古絵巻の本文に最も近いのは現冊子系の本文であると想定する。以上のことをまとめると、【図一】のようになる。

【図一】



松波説が絵巻系から冊子系ができた想定するのに対し、伊東説と勝俣説では、絵巻や冊子以前に、古絵巻が存在していたと想定している。古絵巻の存在を想定する点で、伊東説と勝俣説は一致して

いるが、冊子系本文に対する評価が異なっている。伊東説は、冊子系本文を改作本として読むべきだと主張するのに対し、勝俣説は、冊子系本文は増補、潤色しながらも古絵巻の本文を受け継いでいると主張している。論争が進むにつれ、挿絵や本文の異同等、論点にずれが生じ、比較しにくくなっている。

このように、先行研究では、成立論における論考が中心となってきた。多くの研究者が述べるように、絵巻系本文が素朴かつ簡潔であるのに対して、冊子系本文には、登場人物の詳しい人物造型が認められる。また、絵巻系本文と冊子系本文の間には、簡素化、あるいは長編化という観点では説明し得ない異同が存在する。冊子系本文を読み解くことは、「天稚彦物語」を読み解くうえで重要であるにもかかわらず、先行研究では、絵巻系本文との比較対象として取り上げられるばかりであった。絵巻と冊子の前後関係を決定する外部徴証を現時点では求め得ない以上、成立論からはいったん離れた立場で、冊子系本文の主題を確定することは、喫緊の課題と言えよう。そこで、本稿では、「天稚彦物語」冊子系本文を研究対象とする。まず、冊子系本文と絵巻系本文との比較を通して、姫君の人物造型や、鬼神の正体について検討する。その上で、物語結末部の考察を通して、「天稚彦物語」の主題に迫りたい。

なお、本稿では、冊子系本文は、室町時代物語大成八『七夕物語』(静嘉堂文庫蔵)、絵巻系本文は、室町時代物語大成二『天稚彦草子』(上巻：東京国立博物館蔵、下巻：ベルリン国立東洋美術館蔵)を使用する。取り上げた資料については、私に句読点、濁点をほどこしている。

## 二、姫君の人物造型

「天稚彦物語」冊子系本文は、絵巻系本文と比べ、全体を通して、姫君の心理描写が詳細に語られている。そこで、「天稚彦物語」の主題を考えていくにあたり、まず、冊子系本文における姫君の人物造型について考察したい。先行研究において、姫君の人物造型について言及しているのは、伊東氏<sup>（註1）</sup>である。伊東氏は、冊子系本文における姫君を、「容姿の優れた、賢く、信心深い女性像」として描かれているとする。そこで、本章では、冊子系本文と絵巻系本文の比較を通して、冊子系本文における姫君の人物造型について詳しくみていきたい。

【表一】

冊子系本文	絵巻系本文
<p>いもうと、ことに、①いろこのみふかく、つねのことくさにも、いひたはぶれける。それ、人のちぎりをきくに、おもふにはわかれ、思はぬにもそふならひ、さらにこゝろえがたし。たま／＼あひあふなかは、いつしか、さだめなき世のならひ、しやうじやひつめつことはりをのがれず。さきだつも心うし、また、をくれて、ひとり物を思はんもなをかなし。さればとて、ふたりのおつとに、まみえ</p>	<p>該当箇所なし。</p>

む事、まことの人はいひがたし。たゞ、②よろづよまでも、かはらぬちぎりこそあらまほしけれと、あけくれ、ねがふといへども、そのかひあるべきにもあらず。心にまかせず、とし月をぞおくりける。

【表一】は姫君の恋愛観について書かれている場面である。冊子系本文において、長者の末娘である姫君は「いろこのみ」(①)であり、いつも周囲の者たちに男女の愛について語っているとある。「男女が慕いあつていたとしても別れ、慕ってもいないのに連れ添うという習いは理解しにくい。たまたま想いあつていても、無常の世の習いで、必ず終わってしまうという道理を逃れることはできない。先に死ぬのも辛く、また、死に遅れて、一人物思いをするのもさらに悲しい。そうとはいえ、二人の夫と結婚することは、誠実な人とは言い難い。」と語り、永遠に変わらない愛を望んでいること(②)がうかがえる。このように、冊子系本文では、あめわかみことと出会う以前の姫君の恋愛観が詳しく語られている。それに対し、絵巻系本文には、姫君の恋愛観が詳細に記されている箇所は見当たらない。

【表二】

冊子系本文	該當箇所なし。
繪巻系本文	

ことはりなるかな、このひめは、③すがたかたちの、二人のあねにこえ、たぐひなきのみならず、④心さまのかしこきことは、一をき、ては、十をさとり、⑤しいか、くわんげんのみちをたしなみ、⑥あけくれ、ほとけのみにちにさえ心を入、かうかうをもとせり。

【表二】は、姫君の容姿や性質について書かれている場面である。

冊子系本文には、容姿について、二人の姉とは比べものにならないほど美しい③とある。性質については、賢明であり④、詩歌管弦の道をたしなんでいること⑤、信心深い孝行者であること⑥も書かれている。繪巻系本文では、姫君の容姿や性質について、詳しく語られる場面はない。以上より、冊子系本文における姫君は、容姿の優れた、賢く、信心深い女性であることがわかる。

【表三】

冊子系本文	繪巻系本文
-------	-------

その、ち、川中より、ひかりひるのごとくにかゞやき、なみのうちより、たけ一丈ばかりなる大くちなはいで、すこしもためらはず、ひめ君の御まへにか

ゐの時ばかりなるらむとおもふほどに、風さと吹て、雨はら／＼とふり、神なり、いなづまひらく／＼として、おき中より、浪いとたかく、たつやうに見ゆれ

うべをうなだれ、したをいだし、いつきけるありさま。(中略)⑦ひめぎみ、おもひまうけたることなれば、すこしもおどるき給はず。なんち心あらば、しばらく物をきけ。みづから父母にかしづかれ、人にだに、たやすくま見えんことをいとひしに、いかなれば、しやしんの身としておもひかけけるこそふしぎなれ。さて、なにのさまにてか、我をばこひけん。すみやかにさんげして、とくうしなへとのたまへば、(中略)そのとき、ひめぎみ、まもりがたなをとりいだし、かうべをふたつにきりたまへば、いきやうくんじて、ひかりかゞやくとみえしが、いくわんたゞしくしたる雲の上人いで給ふ。⑧ひめぎみ、かほふりあげてみ給ふに、この世ならぬふぜいなれば、いつしか、おそろしかりしこともわすれはて、れんばのおもひをなし給ふ。かくて、くちなは、また川波にしづみければ、雲の上人は、つりどのにとまりて、かたらひふし給ふ。

ば、姫君、生きたるか、死たるかとおもひて、⑨おそろしきせむ方なく、あるかなきかにておたるに、(中略)直衣きたるおとこの、まことにうつくしきが、走いで、かはをばかひまどひて、こからひつて入て、ふたりふしぬ。⑩おそろしきもわすれて、かたらひふしぬ。

【表三】は、生贄として差し出された姫君が、大蛇と対面する場面である。家族と別れ、川沿いに一人でたたずむ姫君の前に、大蛇

が姿を現す。冊子系本文では、目の前に現れた大蛇に対し、姫君は、自らが両親から愛されて育った身であることや、本来なら生贄となるような身でないことを告げる(⑦)。姫君が、大蛇に対して、強気な態度をとっているのが特徴的である。ところが、姫君は、大蛇の頭から美男子が出てくるとたちまち恋に落ち、契りを結ぶ(⑧)。それに対し、絵巻系本文では、姫君は、生きている心地がしないほど恐怖を感じていること(⑨)がわかる。しかし、大蛇の頭から美男子が出てくると、冊子系本文同様に、姫君は恐ろしさを忘れ、契りを結ぶ(⑩)。冊子系本文において、大蛇に対し強気で立ち向かう姫君の姿は、絵巻系本文の大蛇におびえる弱々しい姫君の姿とは対照的である。このことから、冊子系本文の姫君は、大蛇に立ち向かう強さを持った女性として描かれているといえる。

【表四】

冊子系本文	絵巻系本文
<p>今はなにをか、つゝむべき。我はこれ、天じやうにすむあめわかみこといふものなり。⑪されば心ざしの、せつなることにひかれて、かりに、にんがいにくだり、おぼえずちぎりをこめ侍る事、あさからぬためしなり。</p>	<p>此おとこ、いふ様、われはまことには、海龍王にて有しが、又空にもかよふ事のあり。</p>

【表四】は、契りを結んだ後に、男が自らの正体を明かす場面である。冊子系本文において、契りを結んだ後、男は自らが天上に住む「あめわかみこ」であることを告げる。あめわかみこの口からは、

姫君の志に惹かれて人界に下ったことや、思いがけず契りを結んでしまったこと(⑪)が語られる。絵巻系本文では、男は自らが「海龍王」であることを明かし、空にも通うことのある身だと告げる。冊子系本文に対し、絵巻系本文では、あめわかみこが人界に下った理由は語られない。ここで注目したいのは、冊子系本文において、あめわかみこが、姫君と出会う以前に恋心を抱いていたということである。冊子系本文中に、あめわかみこは、昼は切利天に住み、夜は「みやうれんじやう」という星になつて、一天下るとある。切利天は六欲天のうち、第二の天にあたる。六欲天とは、三界のうち、欲界に属する六種の天である。欲界の中で最も優れた者の住む世界であるが、食欲・淫欲などの欲望を持つ迷いの世界とされる。六欲天は、人間世界よりはるか上方にあると考えられ、切利天は下から二番目にあたる。切利天では、天人は人間と等しく肉体を交えることもできるとされる。このことから、あめわかみこは天人といえども、欲を捨てることができるのではない存在であるといえる。人間と交わることが好ましく思われていない天人という身でありながらも、姫君の志に惹かれ、行動を起こしたのである。

【表五】

冊子系本文	絵巻系本文
<p>われは是、あかつきのみやうじやうとて、五かうのてんにをよぶとき、日かげにさきだつて、三がいをてらすほしなり。⑫御身、わがために、あかつきことのつとめをこたらず、いのり給ひし心ざし、今また、そのほうをんにをしへ侍るなりとて、なを、ねんごろにかたり給ふぞ、ありがたき。</p>	<p>猶行ほどに、めでたき玉の輿に乗たる人にあひたり。又これも、おなじ事にとへば、これよりおくへゆかん程に、瑠璃の地に、玉の屋あり、それに行きて、あめわかみこに物申さむ、と教へ給へば、そのま、に行て、たづぬ。</p>

【表五】は、姫君が、天界に戻ったあめわかみこを追いかけ、天界に行く場面である。姫君は、天界で出会った暁の明星に、あめわかみこの居場所を尋ねる。冊子系本文において、暁の明星は、姫君に、あめわかみこの居場所を教えた理由を語る。姫君が、人界で夜明けことの勤めを怠らず、祈り続けた恩に報いるために教えた(⑫)とある。絵巻系本文では、暁の明星は、姫君にあめわかみこの居場所を教えるが、その理由については語られない。

【表六】

冊子系本文	絵巻系本文
<p>⑬たなご、ろをあはせ、こくうをおがみ給へば、いづくともなく、にしきのごとくなる、五しきのひかり一すじさしければ、べうたたるなみ、さうにわかれてみちみえたり。</p>	<p>該當箇所なし。</p>

【表六】は、暁の明星から居場所を教えてもらった姫君が、あめわかみこのもとへと向かう場面である。冊子系本文において、姫君は、暁の明星の教えに従って道を進み、青々とした海が広がる世界にたどり着く。すると、毒蛇や悪魚が現れ、襲われてしまう。ところが、姫君が両手を合わせ拝むと、波が左右に分かれ、道が開けていく(⑬)。絵巻系本文には、祈りにより、姫君が困難を逃れることのできる場面はみられない。姫君の祈りにより、進む道が開けるといふ描写は、冊子系本文のもつ特徴的な場面であるといえる。【表五】に続いて【表六】の場面においても、姫君の信心深さは、自身を救っているのである。

【表一】～【表六】より、冊子系本文と絵巻系本文を比較したうえで、冊子系本文における姫君の人物造型について、次のことが指摘できる。

- 一、恋愛に関心があり、男女の永遠の愛を望んでいること。
- 二、容姿が優れており、賢いこと。
- 三、大蛇に物怖じせず、立ち向かう強さをもつこと。
- 四、あめわかみこや暁の明星の心を動かすほどの信心深さと志をもつこと。

つこと。

伊東氏は、冊子系本文における姫君を、「谷姿の優れた、賢く、信心深い女性像」とし、江戸時代の女性たちにとって、目指すべき姿だったと指摘している。確かに、容姿が優れていることや、賢いという特徴は、姫君の人物造型として当てはまる。しかし、冊子系本文を詳しく読んでいくと、姫君はただ従順なだけの女性だとは言えない。周囲の者たちに恋愛観を語る姿や、あめわかみことの恋に溺れる姿からは、姫君が色好みであることがわかる。恋愛への価値観を語る姫君の姿は、あめわかみこの心を動かす。また、大蛇に対して立ち向かう姿や、あめわかみこを追いかけ、天界に行く姿からは、自ら行動を起こす強さをもつことが読み取れる。これらの特徴は、先行研究では指摘されていないが、姫君の人物造型を分析するうえで、見逃すことはできない。絵巻系本文では語られなかった姫君の様子が、冊子系本文では詳細に語られている。冊子系本文において、男女の永遠の愛を望む姫君と、その志に感動したあめわかみこが出会うという道理の通った展開が繰り広げられる。そして、姫君は、天界遍歴において、その信心深さから、星や超自然的な力による助けを得る。姫君は、人界での行いが実を結び、あめわかみこに出会い、一度は離れながらも、天からの助けを得て、再会に至ったと考えられる。このように、物語前半部は、あめわかみこ姫君の恋愛が成就する様子が描かれている。このことをふまえて、次章では、「天稚彦物語」の後半部を取り上げ、冊子系本文と絵巻系本文の比較を通して、主題を考察していく。

### 三、鬼神の正体

本章では、天界での再会を果たした姫君とあめわかみこの前に現れ、二人の仲を阻もうとする鬼神を取り上げる。鬼神は、冊子系本文と絵巻系本文ともに登場する。いずれの本文においても、二人を引き離すという重要な役目を果たしているにもかかわらず、冊子系本文・絵巻系本文では、鬼神の立場に違いがみられる。そこで、鬼神が物語に与える影響について、本文をもとに考えていきたい。なお、原文において、冊子系本文では「鬼神」、絵巻系本文では「鬼」と表記されているが、本稿では「鬼神」に統一する。

#### 【表七】

冊子系本文	絵巻系本文
<p>さるほどに、かゝるめでたき天じやうにも、五すい三ねつのくるしみとて、うき事こそおきたれ。⑭しゆみのばんぶくをりやうする、そくさんわうとてきじんあり。もとより、じんづうじざいの身なれば、此事をき、あめわかみこのまへにきたつて、まなこをいらで、いひけるは、⑮いかなれば、げかいの人間を、これにはとゞめ給ふぞや。天じやうと申は、ほとけの國にて侍れば、ほんぶの身をかえずして、きたる事、かいびや</p>	<p>さても、心くるしき事のあるべきをば、いかゞし侍べき。⑯父にて侍る人は、鬼にて侍る。⑰かくておはするときは、いかゞしきこえんと、わびしきとの給に、いとあまましけれど、よしや、さまぐ心づくし成ける身の契なれば、それもさるべきにこそ、こゝをうしとて、又立帰べきならねば、あるにまかせてとおほしけり。かくても日数ふるほどに、この親来たり。女をば脇息になして、うちかかりぬ。まことに目も当て</p>

くよりこのかた、そのためしな  
し。いそぎおつくし給へ」と、い  
かりければ、みこの給はゞ、な  
んぢ、まえんの身として、わが  
まへにぜひなくいたらん事、天  
のおそれはいかゞせんとして、あ  
ふぎをもつてうち給へば、御ま  
えをたち、つあにはおつかへし  
申すべしとて、かきけすやうに  
うせにけり。ひめ君、あまりの  
おそろしさに、色をかへてぞす  
み給ふ。

られぬ、気色なり。⑱「娑婆の  
人の香こそすれ。しはら臭や」  
とて立ちぬ。その後も、たびた  
び来たりけれども、扇枕などに  
しなしつつ、まぎらはしてあり  
ふるに、さや心得たりけん、足  
音もせず、みそかにふつと来た  
り。昼寝をしたりければ、え隠  
さで見えぬ。「これは誰ぞ」と  
言ふに、今は隠すべきやうなら  
ねば、ありのままに言ふ。⑲  
「さてはわが嫁にこそ、使ふ者  
も侍らぬに、賜はりて使はん」  
と言ふに、「さればこそ」と、  
いと悲し。惜しむべきならね  
ば、やりぬ。

【表七】は、鬼神の登場場面である。冊子系本文において、鬼神は、須弥の幸いを利養する粟散王として登場する(⑭)。鬼神は神通自在の身であり、姫君が天界に来たことを知ると、二人の前に現れる。仏の国である天界に、姫君が凡夫の身のまま来たことを咎める、姫君を人界に追い返すよう、あめわかみこに求める(⑮)。しかし、あめわかみこは鬼神の言葉に応じない。あめわかみこが、扇をもつてうつと、鬼神は立ち去っていく。それに対し、絵巻系本文では、鬼神は、あめわかみこの父という立場(⑯)で登場する。【表七】の絵巻系本文は、あめわかみこが姫君に、父である鬼神について語る場面である。あめわかみこは、父が、姫君の存在を嫌がるだろうと考える(⑰)。数日後、鬼神が二人のもとを訪れる。あめわ

かみこは、姫君を脇息などに変化させるが、人間界の香りによって鬼神に気づかれてしまう(⑱)。ひそかに部屋に入ってきた鬼神を前に、姫君の正体があらわになる。あめわかみこも父に逆らうことができず、姫君はさらわれてしまう(⑲)。

冊子系本文と絵巻系本文で大きく異なる点は、鬼神の立場である。冊子系本文では、須弥山の粟散王として登場するのに対し、絵巻系本文では、あめわかみこの父として登場する。この立場の違いは何を示すのだろうか。あめわかみこの鬼神への対応に注目すると、冊子系本文と絵巻系本文で違いがみられる。冊子系本文では、あめわかみこは姫君を天界から追い出そうとする鬼神に対し、強い態度で立ち向かう。それに対し、絵巻系本文では、姫君の姿を変えて守ろうとするも、父である鬼神に逆らえないあめわかみこの姿が描かれる。鬼神を父として登場させる絵巻系本文よりも、鬼神という独立した存在で登場させる冊子系本文の方が、あめわかみこの、姫君への強い想いを際立たせているといえる。

【表八】

冊子系本文	絵巻系本文
<p>そのとき、きじんいかりをやめ、いかにひめ君、いまはこれまでなり。さんげにつみをゆるし給へ。⑳われぜんしやうは、人わうのはじめに、おうしうにすみしものなり。むまれながらいろくろく、たけたかく、さながらきじんのごとくなりとして、</p>	<p>該当箇所なし。</p>

ちかづく人もなし。まして、こ  
と葉をかはすることもなく、一  
しやうさいあひのみちをしら  
ず。とし百年にをよびて、つゝ  
にむなしくなる。されば⑳一し  
やうふほんのかいりきにて、い  
ま天じやうにむまれ、ほとけの  
國にはすみけれども、あくしん  
はくせす、きじんのすがたと  
なりけり。しかるに、㉒御身、  
ちぎりふかくまします事、わが  
みのむかしをおもふに、しつと  
だえがたくして、この七日があ  
ひだ、あくぎやう、ふだうのは  
たらきをなすといへども、これ  
よこしまのみちなれば、さらに  
御身をいたみ給はず。此ほどの  
せめにより、もろくのあくこ  
うぼんなふ、みなことごとくせ  
うめつして、御身もけふより天  
人となり給ふぞや。㉓此ぎやく  
えんにひかれて、あつきの心を  
ひるがえし、我もしゆごしんと  
ならん、とかうべを地につけ  
て、かいげしけるこそふしぎな  
れ。

【表八】は、鬼神の与える困難を乗り越えた姫君に対し、鬼神が  
自らの過去を語る場面である。【表七】で取り上げた場面の後、冊  
子系本文・絵巻系本文ともに、鬼神は姫君に対し、三つの困難を与

える。数千匹の牛に野辺の草を食べさせること、千石の米を倉替え  
すること、ムカデのいる部屋に閉じ込められることである。姫君  
は、あめわかみこの袖を振ることで、三つの困難すべてを乗り越え  
る。冊子系本文では、それらを乗り越えた姫君のもとに、鬼神が外  
道たちを連れて現れる。あめわかみこの加護により、姫君にかなわ  
ないことを悟った鬼神は、自身の過去について語り始める。鬼神  
の前世は奥州に住む者であった。生まれながら色黒で、身長が高  
く、鬼神のようだとして近づく人もいなかった。そのため、女と言  
葉を交わすこともなく、一生人と夫婦の契りを結ぶことがなかつた  
⑳。不犯の戒力として天上に生まれ、仏の国に住むこととなつ  
たが、悪心はなくならず、鬼神の姿になつてしまつた㉑。姫君  
のあめわかみこへの強い想いに嫉妬し、七日間悪行を働いた㉒、  
と語る。あめわかみこの加護により、困難を乗り越える姫君の姿を  
見て、鬼神は、姫君を人界に帰らせることは不可能だと悟る。そ  
して、姫君を天人として認め、自身も守護神となろうと改悔した  
㉓。それに対し、絵巻系本文では、鬼神が自身について語ること  
はない。加えて、姫君を天人として認めることも、自身が守護神と  
なることもない。

先行研究において、伊東氏<sup>(註)</sup>は、「難題譚は親が婿、あるいは嫁  
としてふさわしいかを試すものであり、難題を課すのは絵巻系の  
「父」が自然であろう」と指摘する。たしかに、親が嫁に対し困難  
を与える場面は、他の作品においてもよく見られる。しかし、あめ  
わかみこの、姫君への強い想いを際立たせていることや、過去につ  
いて詳細に語られていること、姫君を襲つた動機が語られる点か  
ら、冊子系本文の方が鬼神の存在をより重く意味づけていると言え

ないだろうか。姫君とあめわかみこの仲を引き離そうとする冊子系本文の鬼神には、一生不犯の過去があった。鬼神を鬼神たらしめているのは、あめわかみこの父として登場させる絵巻系本文ではなく、独立した存在として登場させる冊子系本文であると考ええる。

#### 四、恋愛教訓譚としての冊子系本文

本章では、従来詳しく論じられていなかった『七夕物語』の結末部を取り上げ、冊子系本文の主題に迫りたい。冊子系本文・絵巻系本文ともに、結末部において、あめわかみこと姫君は、離れて暮らすことになる。しかし、冊子系本文と絵巻系本文では、二人が離されてしまうきっかけに違いがみられる。この点に注目しながら、『七夕物語』結末部をみていきたい。

#### 【表九】

冊子系本文	絵巻系本文
<p>みこの給ふ、<sup>24</sup>にんがいなるべき身の、一しよにあらん事こそよしなけれ。たゞ月をへだて、七日くにあひたてまつらんとちぎりて、にしひがしにわかれ給ふ。ひめ君きこしめし、あんなさけなきおほせかな。<sup>25</sup>このほどひめもすに、ちぎりふかくましく、わかれて一夜だにあかしかねつる我中を、ひとせ一どあはんとのた</p>	<p>しかるべきにこそあるらめ。<sup>28</sup>もとの様にすみあはむことは、月に一度ぞといひけるを女房あしく聞きて、としに二たびとおほせらる、か、といへば、さらば年に一度ぞとて、<sup>29</sup>瓜をもちて、なげうちにうちたりけるが、天の川となりて、七夕、ひこ星とて、年に一度、七月七日に逢ふなり。</p>

まへばいかに、とてなきたまへば、おもひのなみだ雨となり、こひのなかく、身もうくばかりに水いで、をのづから川をへだて、おはしける。いまの天河これなり。<sup>26</sup>きじんもしゆつせのほんくわいをとげ、まもりの神となりけり。<sup>27</sup>いまの世の、ひこぼしと申はあめわかみこ、おたなはたこれなり。ひめ君は、おもひめとて、めたなばたと申なり。さてこそ、御身のうへに、おもひあはせ、しゆじやうのちぎりをまほり給ふとぞ。

【表九】は、七夕の由来についての場面である。冊子系本文において、【表八】の場面の後、改悔した鬼神と、天人となった姫君は、あめわかみこに連れられ、星の天に下る。【表九】の冊子系本文は【表八】の冊子系本文に続く場面である。あめわかみこは姫君に対し、「人界にいるべき身であるのに、一緒にいることは好ましくないだろう。毎月七日に逢おう。」と提案する(24)。それを聞いた姫君は、「離れ離れになって一夜過ごすことさえできない私たちの仲なのに、一年に一度逢おうというのはどうしてか。」と告げ、悲しみの涙を流す。姫君の涙は雨となって降り、川ができる。ついに二人は、川によって隔てられてしまう。この川が現在の天の川である(25)。鬼神も出世の本懐を遂げ、守護神となり(26)、あめわかみこは彥星、姫君は織姫となった(27)。【表九】の絵巻系本文は、鬼

神が、あめわかみこと姫君に、離れて暮らすよう命令する場面である。月に一度逢うように命令する鬼神の言葉を、姫君は年に一度と聞き間違えてしまう(28)。鬼神が投げた葦からできた水が天の川となり(29)、二人は年に一度、七月七日に逢うことになったとある。

【表九】において、冊子系本文と絵巻系本文で大きな違いがみられるのは、姫君に、月に一度の逢瀬を提案した人物である。冊子系本文ではあめわかみこ、絵巻系本文では鬼神となっている。冊子系本文において、鬼神は、姫君が天界に居ることを認めている。それにもかかわらず、あめわかみこ自ら、離れて暮らすことを提案している。提案の理由は、本文中では語られていない。天界に行き、鬼神から与えられる数々の困難を乗り越え、再び共に暮らすことができるようになった姫君に対し、なぜあめわかみこは、このような提案をしたのだろうか。

また、冊子系本文と絵巻系本文に共通する点としては、姫君の聞き間違えにより、月に一度ではなく年に一度の逢瀬となってしまうことがあげられる。聞き間違えの理由については、冊子系本文の結末部で明かされている。

【表十】

冊子系本文	絵巻系本文
いかなれば、月の七日にあひ給ふべきとありしを、としに一ど、き、あやまり給ふ事、ふしぎなりといふに、それ、にんげ	該当箇所なし。

んのならひ、<sup>30</sup>あまりむつまじき中は、つるにわかれのもとひとなり、たとひれんりのおもひをなすとも、<sup>31</sup>さのみうちとけたらんは、りべつのはじめなるべし。たゞ心におこたらず、<sup>32</sup>ながきちざりをにんげんにしめさんための御ちかひ、ありがたかりし事どもなり。

【表十】は、語り手が、姫君の聞き間違いの理由について語る場面である。冊子系本文では次のように書かれている。毎月七日に逢うのを年に一度と聞き間違ったのは不思議であるが、人間の習いで、あまりにも睦まじい仲は、ついには別れのもととなる(30)。たとえ連理の想いをなすといっても、打ち解けすぎるのは、離別のはじまりになる(31)。ただ心を許していい加減にせず、長い契りを人間に示すための御誓いは、すばらしいことである(32)、とする。絵巻系本文では、姫君の聞き間違いの理由について明かされていない。冊子系本文のみが、姫君の聞き間違えの理由を明かしており、これは物語を構成するうえで、見逃してはならない場面である。

以上、第二章における姫君の人物造型、第三章における鬼神の正体、本章における七夕の由来の考察を通して、冊子系本文、すなわち「天稚彦物語」の主題は、「男女の恋愛への教訓」だと考えられる。【表二】や【表五】から、姫君はもともと、仏道の勤めを怠らない、信心深い人物であったと考えられる。しかし、あめわかみこと出会った後からは、姫君が勤めを行う様子はいかがえない。このこと

から、あめわかみこと出会って以降、姫君は、以前とは異なり、一途な恋に溺れ、仏道をおろそかにしていたのではないかと推測される。あめわかみこを追いかけて天界を訪れた姫君と、それを受け入れたあめわかみこは、鬼神の存在により仲を阻まれる。鬼神の改悔により、二人は再度共に過ごせるようになるが、今度はあめわかみこ自身が、月に一度逢うことを提案する。姫君は、あめわかみこの提案を年に一度と聞き間違ひ、悲しみの涙を流す。その涙が天の川となり、二人は隔てられてしまう。共に暮らしたいと願う姫君の想いとは裏腹に、二人は年に一度しか逢えないことになってしまったのである。あめわかみことの恋に溺れた挙げ句、あめわかみことの仲を隔てられる姫君の姿を読者に示すことで、恋愛における教訓を説こうとしたのだと考えられる。度を越した愛情は、関係破綻の一步となる。作者は二人の姿を通して、恋に溺れることなく気持ちを引き締めることが長い契りを結ぶことにつながると、読者に伝えたかったのではないだろうか。以上より、「天稚彦物語」冊子系本文は恋愛教訓譚だと考える。

## 五、「天稚彦物語」冊子系本文の成立

「天稚彦物語」冊子系本文の主題を恋愛教訓譚と結論づけたうえで、本章では、これをふまえつつ、伊東氏<sup>(注1)</sup>が指摘する冊子系本文の問題点についてみていく。

人間の住む下界を汚れたものとするのは、冊子系の一貫したスタンスであるが、天界に尋ねて来るよう言い残した御子自身が、月を隔てて会おうと提案する冊子系の本文は、やはり不自

然な展開であることはいなめないように思う。

伊東氏が指摘しているのは、【表九】冊子系本文において、あめわかみこが姫君に対し、月に一度の提案をした場面である。あめわかみこは、「にんがいなるべき身の、一しよにあらん事こそよしなけれ」として、姫君に、離れて暮らすことを提案している。あめわかみこの言葉からは、姫君が「にんがいなるべき身」であることが懸念されていることがうかがえる。人間でありながらあめわかみこと結ばれることを切望する姫君が、数多の難題を乗り越えて思いを遂げた末に、あめわかみこから距離を置くことを告げられる展開は、確かに不自然である。伊東氏はその不自然さの原因を追究していないが、冊子系本文を理解するうえで、この点の解決は欠かせないだろう。この疑問について検討するために、あめわかみこ、姫君自身、鬼神それぞれが、物語の各場面において、人間である姫君をどのように認識していたのかみていきたい。

<p>場面</p>	<p>姫君</p>	<p>あめわかみこ</p>	<p>鬼神</p>
<p>あめわかみこ正 体を明かす</p>	<p>「<sup>33</sup>あらあさましや。みづからにんげんの身として、やごとなき雲の上人に、夢のちぎりをこめながら、そのなごりをわすれかね、したひたてまつるも、いかでふたたび、まみえおはしまさん。」</p> <p>「こ、ろのうちにきせいし給ふ南無や、日のもとの大小のじんぎは、このたびふうふうちやくにかされて、<sup>34</sup>ほんぶの身として天上にあこがれし事、じやいんの御とがめのがれがたしといへども（後略）」</p> <p>「ひめぎみ、なみだをおさえて、<sup>35</sup>みづからいやしき身のいかなるしゆくえんにや。露ばかりのちぎりをこめ給ひ、夢のやうにまたもみえたまはざる事、うらみでもあまりあり。されば<sup>36</sup>せむせのかいぎやうつたなきゆへに、げかいのにんげんとむまれけるこそ、かなしけれ。」</p>	<p>「心ざしのせつなることにひかれて、かりににんがいに下り、おぼえずちぎりをこめ侍る事、あさからぬためしなり。さればいつまでか、<sup>37</sup>つたなきくにすむべきにもあらず。天じやうにかへらんとおもふなり。いま七日すぎは、またまいりあふべきなり。」</p> <p>「それ<sup>38</sup>天上のならひととして、かりにもにんげんにまみゆる事かたし。されども、ゆうなるなさげにひかれてあまくだるといへども、つるにそひはつべき身ならねば、心ならずもうちすてぬ。」</p>	<p>再会</p>
<p>天界遍歴</p>	<p>姫君の祈りにより道が開ける</p>	<p>あめわかみこ</p>	<p>鬼神</p>

鬼神の登場

鬼神に攫われる  
姫君

天人になる  
姫君

星の天へ

「<sup>39</sup>御身、ふじやうなる身なれば、あくまのしやうけのがれ給はじ。<sup>40</sup>いま十七日すぎは、しやうぐの身と成て、天人のくらゐにいたり給ふ。」

「いつまでよなくかよふべき。いざ、らば、<sup>41</sup>ふしやうふめつのほとけとなり、みらいやうぐにいたるまで、くちせぬちぎりを結ばん。」  
「<sup>42</sup>にんがいなるべき身のしよにあらん事こそよしなけれ。たゞ月をへだて、七日ぐにあひたてまつらん〔後略〕」

「いかなれば、げかいの人間をこれにはとゞめ給ふぞや。<sup>43</sup>天じやうと申すは、ほとけの国に待れば、ほんぶの身をかへずしてきたる事、かいびやくよりこのかた、そのためしなし。いそぎおつくし給へ。」  
「なんぢ、しうちやくふかく此所にきたる事、<sup>44</sup>天上のけがる、こそきつくわいなれ。」

「此ほどのせめにより、もろぐのあくごう、ほんなふ、みなことぐくせうめつして、<sup>45</sup>御身もけふより天人となり給ふぞや。」

【表十二】は、姫君、あめわかみこ、鬼神それぞれの、姫君が人間であることに対する心情があらわれた部分を抽出したものである。

る。姫君は、人間の身でありながら、あめわかみこに恋心を抱いていることに対し、見苦しく卑しいと考えていた(33)~(35)。そして、人間として生まれたのは、前世で戒行を怠ったためだ(36)としている。このように、姫君には、物語全体を通して、自らが人間であ

ることを嘆く描写が多くみられる。

鬼神は、仏の国である天界に、姫君が人間の身のまま来たことを咎めている(43)。姫君の存在は、天界を不浄に染めてしまう(44)とも考えている。ところが、あめわかみこの加護により、困難を逃れる姫君を見て、人界に帰すことは叶わないと悟った鬼神は、態度を一変し、姫君を天人として認めている(45)。鬼神は、物語にお

いて、人界や人間に対して、悪い印象を持っているという点で一貫している。しかし、姫君が天人となる事は認めており、天人となった後は、あめわかみこと暮らすことを咎めていないのである。

最後に、あめわかみこの心情についてみていく。本来なら、天人が人間と交わることは許されていない(38)。ところが、あめわかみこは、姫君の志に惹かれたため、天人の身でありながら人界に下る。人界で逢瀬を重ねる二人であったが、あめわかみこは、とるにたらない人界にこのまま住み続けることはできないとし、姫君を残して天界に戻る(37)。天界での再会後、あめわかみこは、鬼神に

さらわれる姫君に対し、不浄な身なので仕方がないし(39)、十七日が過ぎれば天人となることができる(40)と告げる。あめわかみこ自身も、鬼神と同様、姫君が人間であることを好ましく思っていないことがわかる。しかし、困難を乗り越えた姫君に対しては、不生不滅の仏となって、永遠の契りを結ぼう(41)と告げている。本来ならば、天人となった姫君は、あめわかみこと共に天界で暮らせるようになったはずであるにもかかわらず、冊子系本文では、この場面の後に、二人が仲睦まじく暮らす様子は描かれていない。あめわかみこは、人界にいるべきであるはずの姫君と、天界で暮らすのは好ましくない(42)と告げる。【表七】冊子系本文では、人間である姫君を、人界に戻すよう求める鬼神に対し、あめわかみこは、強い態度で反抗していた。姫君が人間であるときさえ、離れることを拒んだあめわかみこが、天人となったにもかかわらず、離れて暮らすことを提案するのはいかにも不自然である。困難を乗り越え、天人となった姫君が、あめわかみこと共に天界で再び仲良く暮らすことができるようになったという結末の方が、本来の物語であった

のではないだろうか。【表十二】④における、あめわかみこの発言の後、あめわかみこと姫君、鬼神は三人で星の天に下る。もしこの場面が物語の結末であったならば、主題は恋愛成就譚といえたであろう。あめわかみこが姫君に月に一度の逢瀬を提案した場面がなければ、矛盾のない本文が成立するのである。このことから、「天稚彦物語」冊子系本文が成立する以前に、あめわかみこと姫君の恋愛成就譚を描く物語がすでに存在していたと考えることも可能であろう。

そこで、いま仮に、冊子系本文のもととなった本文、すなわち原冊子系本文の存在を想定すれば、問題点が二点あげられる。

一点目は、七夕の由来である。「天稚彦物語」は、従来冊子系・絵巻系ともに七夕の由来譚とされてきた。しかし、原冊子系本文から結末部を除けば、七夕の由来について語られる場面はなくなることになる。「天稚彦物語」冊子系本文において、七夕に関して述べられているのは、物語冒頭部と結末部のみであった。原冊子系本文は、冊子系本文から七夕の由来について語られている冒頭部と結末部を除いたものと想定することができる。

二点目は、登場人物の本地である。冊子系本文では、七夕の由来が語られたのち、登場人物の本地が語られる。鬼神の本地は、愛染明王であった。愛染明王を本地にもつ鬼神が、あめわかみこと姫君に正しい道を歩ませるために、二人を引き離そうとしたと考えることも出来る。しかし、【表八】冊子系本文において、鬼神は、自身の前世のせいで、姫君を襲ったことを告白していた。愛染明王としての本地と、前世の因縁に縛られた鬼神の行動や役割は無関係である。また、あめわかみこ、姫君も、それぞれ本地が勢至菩薩、如意

輪観音とあるが、物語に本地が影響を与えている場面は見当たらない。登場人物の本地を語る物語結末部は、冊子系本文の主題に影響を及ぼしていないのである。

以上より、冊子系本文が成立する以前に、冒頭部と結末部を除いた物語がすでに完成していたこと、それを原冊子系本文と想定できることを提案したい。この仮説により、「天稚彦物語」の書名が複数存在していることや、冊子系本文に矛盾が生じてしまった理由の説明も可能となるのではないだろうか。

### 【注】

- (1) 秋山光和「天稚彦草紙繪巻をめぐる諸問題―上巻圖様の新出を機に―」(『國華』九八五、一九七五年十二月)
- (2) 松波久子「御伽草子『七夕』と昔話」(『大阪青山短大国文』三、一九八七年二月)
- (3) 勝俣隆「中世小説『あめわかみこ』の七夕系本文系統新旧に關する一考察―絵と本文の齟齬を通して―」(『愛文』二三、一九八七年九月)
- (4) 松浪久子「御伽草子『七夕』の展開―本文と絵の関連から―」(『大阪青山短大国文』四、一九八八年二月)
- (5) 伊東祐子「天稚彦草子」の二系統の本文をめぐって―繪卷系から冊子系へ―」(『国語と国文学』八一、二〇〇四年三月)
- (6) 勝俣隆「お伽草子『七夕(天稚彦草子)』の諸問題」(『奈良絵本・繪卷研究』四、二〇〇六年九月)
- (7) 伊東祐子「天稚彦草子」の二系統の本文の展開とその性格―

繪卷系・冊子系 赤城文庫旧蔵本 乾陸魏說話をめくって―」(『都留文科大學研究紀要』六五、二〇〇七年三月)

- (8) (7) に同じ
- (9) (7) に同じ
- (10) (7) に同じ
- (11) (7) に同じ

### 【付記】

本稿は、山口大学人文学部国語国文学会第五〇回研究発表会(二〇二五年五月十日開催)における口頭発表に基づく。席上ご質問ご教示くださいました方々に御礼申し上げます。

(たむら・ちなつ)